

「全力の先にあるもの、本気の先にあるもの」

240902

2学期のスタートに当たり、夏休み中に印象に残ったことについて話をします。

夏休みの前半のパリオリンピックから、私は「敗者の美しさで強さ」を感じました。メダルを獲得した選手の笑顔、喜ぶ姿から大きな感動とエネルギーをもらいました。一方で、敗者の姿も私は印象的でした。全力でその目標に向けて取り組んできた選手からは、たとえ負けてもその姿には美しさで強さ(命の輝き)を感じました。柔道の阿部詩選手や男女のバレー、バスケットチームをはじめ多くの選手、チームが敗者となりましたが、その姿はその人の本気の思いが伝わってくるのですがいいものでした。

誤審と言われている「待て」が宣告されてからも攻撃され敗れた柔道の永山竜樹選手は、その後の敗者復活戦を制して銅メダルを獲得しました。そして、永山選手はそれ以後、審判を責める発言は一言もありませんでした。むしろ自分自身の「隙」を敗因とする言葉を発していました。自分が本気でやってきたことを人の責任で終わらせたくはないのかもありません。

オリンピックという世界最高峰の一発勝負の戦いです。一秒にも満たない、ほんの一瞬のズレが勝敗を決します。負けた悔しさは当然あると思いますが、自分との闘い、相手との闘いをぎりぎりのところで乗り越えてきたからこそ、負けても見ている人の心を打つのだと思います。まさにその人のもつ命の尊さ、輝きを感じる瞬間に私たちの心が動くのだと思います。

読売新聞に掲載された「広角多角」というコラムに記された一節「勝者の笑顔に勇気をもらい、敗者の涙に胸を打たれる」まさにそんな姿があり、多くの競技、選手が「全力の先にあるもの、本気の先にあるもの」を感じさせてくれたパリオリンピックではなかったでしょうか。